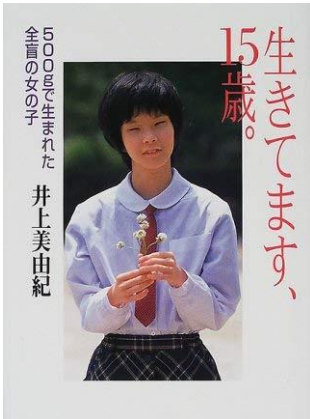


深イ～話！

No.107

——「生きてます、15歳」(井上美由紀著より)——

(美由紀さんのお母さんは妊娠中に、婚約者の男性を交通事故で亡くしました。そのショックで流産に近い状態で出産しました)



私は生まれたときの体重が 500 グラムしかありませんでした。生まれてすぐお医者様から説明があったそうですが、母はあまりの小ささに、涙があふれて先生の説明が聞き取れなかったそうです。

私の5本の指はまるでつまようじのよう、頭の大きさは卵ぐらい、太ももは大人の小指くらいだったそうです。

それから7か月間、私は病院の保育器の中で育ちました。

母はその間、雨の日も雪の日も、毎日欠かさずに、私に会いに来てくれました。母が指を私の手のひらにやると、私はそれをしっかりとにぎりしめていたそうです。

母が私に会いに来る時間になると、看護婦さんたちは、あわてて私の顔をきれいにふいたり、おむつをかえたり、大変です。なぜなら、私の顔が少しでも汚れていようものなら、母からきつく叱られるからです。

「どうして今日は顔がきたないとね。顔くらいきれいにふいてやらんね。忙しいとはわかるけど、それがあんたたちの仕事やろう。」と言っていたそうです。

生まれて5ヶ月くらいになると、保育器から出て母に抱かれました。その軽さに母は、「よくここまで生きてきたね。よく頑張ったね。えらかったね。」と言って泣いたそうです。

そのころ母は、私の目のことをお医者様から告げられました。

「美由紀ちゃんの目は、将来、ものを形として見ることができません。」

母はそのとき、ふいてもふいても涙があふれ出て、どこをどうやって家まで帰り着いたのか、分からなかったと言います。

でも母は、間もなく気持ちを切りかえ、「美由紀とふたりで、がんばって生きていこう。」と誓ったそうです。

私が幼稚園の頃、母とふたりで近くの公園に行ったときのことで。

遊ぶ前に母は、「ここにベンチがある。」「少し歩くと看板があるから注意しなさい。」などと、その公園の様子をこまかく教えてくれました。

でも、私はそこで遊んでいる途中に、その看板に頭をぶつけて、大けがをしてしまいました。ところが、母は私を助けてくれません。また、転んでけがをしても知らん顔です。

「あんたが注意して歩かんからやろ。痛かったらもっと気をつけて遊ばんね。」

母の言葉はそれだけです。

私が2階の階段から落ちて、本当に痛くて、動けなくなったことがありました。

そんなときでも母は、上から、「あんた、そんなところで何しようかね。」

「階段から落ちて痛くて動けん。」と言うと、母はたった一言、「ごくろうさん」それだけでした。

でも、あるとき、こんな出来事がありました。私が公園のブランコに乗って遊んでいると、男の子が3人やって来るなり、私の顔をのぞき込んで、

「こんやつは、目がみえんばい。」

そのとき母がそばに来て、

「目が見えんけん、なんね。こん子はあんたたちよりよっぽどがんばりやで、思いやりがあるとよ。分かったね。」と言いました。そしたら、その男の子たちが、

「おばちゃん、ごめん」と言って、いっしょに遊んでくれました。

私が小学3年のころ、母とふたりで補助輪をとって、自転車に乗る練習をしました。

私はてっきり母が、自転車の後ろの荷台を持ってくれるものだと思っていました。ところが母は、ベンチに座って、大声で叱るだけなのです。私は自転車ごと倒れてしまい、ひじやひざからは血がふきだしました。でも母は、知らん顔です。

一回倒れたら、自転車がどこにあるか探すのが大変です。やっとのことでハンドルをつかんでも、今度は自転車をおこすのにひと苦労です。それでも母は大声でどなるばかりです。私は腹が立って、腹が立って、「なんて冷たい母親だろう。」と心の中で思いました。

しばらくの間、乗ってはたおれ、乗ってはたおれしているうちに、なんと自転車がスイスイ進むようになったのです。そのとき、母が私のそばに来て、

「美由紀、よく頑張ったね。何でも根性やろう。やろうと思ったらできるやろう。」と言って、ふたりで抱き合っ

て喜びました。今、私は中学3年生になりました。今でも母には、いろいろなことを教えてもらっています。人に思いやりを持つこと、やろうと思ったらできるまで頑張ること、礼儀作法をきちんと守ることなどです。私はそんな母が大好きです。

私は目が見えないので、たくさんのごことはできないかもしれませんが、でも努力することはできます。今度は、母に喜びの涙をながしてもらいたい、と思います。

それは、ふいてもふいてもあふれ出てくる、喜びと幸せの涙です。それは私が私の夢を実現できたときに、かなうことでしょう。

頭を大けがしたり、自転車で転んだ時、階段から落ちた時・・・お母さんは飛んで行って、助けてやりたかったのだらうと想像できます。それでも、一人で生きていけるように、心を鬼にして厳しく育ててこられたことに心から尊敬します。

これは、18年前の本です。今、美由紀さんは夢(福祉の仕事に就いて、お年寄りの世話をしたい)をかなえてらっしゃいます。